

論
文

A Trial to Translate Volubly Hegel's "Phaenomenologie des
Geistes" 7

HARASAKI Michihiko
Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

I translate page 403 to 429 of the original text.

ヘーゲル『精神現象学』饒舌訳の試み その7

原崎 道彦
(高知大学教育学部)

b 人倫的な行動。人間たちの知と神々の知。罪と運命。

しかし、この国では、普遍的なものとの個別のものとの対立がいま見たような性質のものであるため、自己意識はまだ、その正しいすがたにおいて登場していない。つまり、個別なものとして存在する人間が個体として登場していないのである。この国では、個体であることが認められているものとしては、一方の側に共同体の普遍的な意思があり、他方の側に家族に流れる血があるだけなのである。―個別なものとしての人間は、現実ならざる影を意味するものではない。いまだいかなる行為もなされてはいない。なされた行為こそは、現実的なものとしてある自己なのである。―なされた行為は、人倫的な世界の静かな有機組織とそれが静かに営む運動を、攪乱するものとして存在する。倫的な世界においてあらわれるのは、人間たちを支配する法則と神々を支配する法則という二つの本質がたちづく秩序と調和であり、二つの本質は、互いのかけがえのなさを証し合いながら、互いを欠けたところがない完全なものとするものとして存在しているのだが、行為がなされることによって、その二つの本質は互いに対立しながら一方から他方へと移行するようになり、そうした移行のさなかで二つの本質のどちらもが、互いに相手のかけがえのなさを証すものとして存在するよりも、自分と【404】相手の無価値さを証すものとして存在するものであることを明かすのである。―できごととは、怖ろしい運命が永遠に必然的なこととしてくりひろげる否定的な運動となる。その運動が、神々を支配する法則と人間たちを支配する法則とを深淵において単純なひとつのものへと撚り合わせるのである。それだけではない。その二つの支配的な力が自己意識として存在するのは男としてであり女としてであるわけだが、その男と女も、深淵において単純なひとつのものへと撚り合わされるのである。―が、我々から見れば、そのときそこでは、純粹に個別的なものとしてある自己意識が絶対的に自分のちからで存在するようになることへの移行がなされているのである。

そのような運動が発する根底であり、そうした運動をなしたたせる根底でもあるのが人倫の国である。しかし、そうした運動を行為としてなされたものとして存在するのは、自己意識である。が、自己意識は人倫的な意識としてあり、人倫的な本質にかなつたありかたをすることのほうへと、つまり自分が果たすべき義務のほうへと、純粹にかつ単純に向いたままなのである。自己意識には、恣意的なふるまいも、恣意的なふるまいがひきおこす自己意識間の争いも存在しないし、なすべきことを決定できないでいるということもない。というのは、もろもろの法則をひとにむかつて与えたり、それらの法則が人倫的な本質になつたものであるかどうかを吟味するということは、放棄されているからである。自己意識にとつて、人倫的な本質になつたありかたは、そのままであるもの、揺らぐことがないもの、矛盾をかかえることが

ないものなのである。したがって、激情と義務との葛藤が演じられる下卑た劇が催されることはないし、義務と義務との葛藤が演じられる滑稽な劇が催されることもない。―が、後者の葛藤も、内容的には、激情と義務とのあいだの葛藤と異なるものではない。というのも、激情も、義務として表象することができるものとして存在するからである。どうしてかと言えば、意識にとつて義務がそのまま意識の実体的で本質的なありかたとしてあることをやめて、意識が自分のうちに還るとき、義務は、形式的に普遍的なものとなり、それにはどのような内容も問題なく収まることができるからであり、それはさきに生じたことでもあった。が、義務と義務との葛藤が、激情と義務との葛藤とは異なり、喜劇的なものであるのは【405】、それが、対立するものが絶対的なものとしてあるという矛盾を表明するものだからであり、それゆえそれがおこなっているのは、義務が絶対的なものであることを表明しながら、直ちに、その絶対的なものが無価値であることを表明することだからである。―しかし、人倫的な意識は、自分がおこなうべきことを知っている意識なのであり、神々を支配する法則へであれ、人間たちを支配する法則へであれ、帰属が決定している意識なのである。意識がどちらに帰属するかが直ちに決まるのは、それぞれの意識がそのものとして存在するものとして存在しているからなのであり、そしてそのことは同時に、意識が男や女という自然的存在として存在するということを意味する。それは我々がすでに見たとおりである。一方の性を一方の法則に割り当て、他方の性を他方の法則に割り当てるものとして存在するのは、意識が置かれた状況とか意識による選択というような偶然的なことではなくて、男であるか女であるかという意識の自然的本性なのである。―あるいは逆に、神々を支配する法則、人間たちを支配する法則という二つの人倫的な支配力の側から見れば、その二つの人倫的な支配力そのものが個体としての存在を手に入れて現実化する場所として、男と女という二つの性が存在することになる。

ところで、人倫とは、いま見たように、法則への帰属が直ちに決定するというところにおいて成り立つものとして存在しており、意識にとつては、自分が帰属する一方の法則だけが本質として存在しているのだが、他方では、二つの人倫的な支配力が現実的なものであるのは、意識の自己においてなのである。そしてそのことによつて、人倫的な二つの支配力は、排除し合い、対立し合うものという意味をもつことになるのである。人倫的な二つの支配力は、人倫の国においては、そのものとしてのみ存在するものであるが、自己意識においては、自分のちからで存在するものとなるのである。人倫的な意識が【406】二つの支配力のどちらかへの帰属が決定しているものとして存在するということが意味するのは、人倫的な意識が本質的に性格として存在するということである。意識にとつては、二つの支配力のどちらもが等しく本質的なもの

として存在することはない。それゆえ、対立が、意識が果たすべき義務と、それを妨げる不当な現実のみとの不幸な葛藤というかたちであらわれることになる。人倫的な意識が自己意識としてあるとき、そうした対立のうちにあるのであり、人倫的な意識がそうした対立のうちにある自己意識としてあるとき、意識は同時に、自分と対立する現実を自分が帰属する法則に暴力をとおして屈服させるか、あるいは、自分と対立する現実を欺くということへと向かうことになる。二つの人倫的な意識のそれぞれは、正当性を自分の側にしか見ないし、相手の側には不当性しか見ないから、二つの人倫的な意識のうち、神々を支配する法則に帰属する意識が他方の側に目撃するのは、人間たちが偶然のなりゆきでくりひろげる暴力的なふるまいであり、人間を支配する法則に割り当てられた意識が他方の側に目撃するのは、内面へ向かいながら自分のちからで存在することにもなう我意であり、統治への不服従なのである。というのも、人間たちを支配する法則に帰属するものたちが統治にさいして発するもろもろの命令は、白日のもとにある普遍的で公的な感覚のものだが、神々を支配する法則に帰属するものたちがいづく意思は、内面へと閉じ込められた地下の感覚だからであり、後者の地下的な感覚が、個別的なものとしてある意識がいづく意思として存在し、前者の公的な感覚と矛盾するものとしてあらわれるとき、それは傲慢さとなるからである。

さきに a では、人間を支配する法則と神々を支配する法則とがともに人倫的な実体のうちにあり、二つの法則の対立は、意識をもつものとしてある人間と、意識をもたないものとしてある自然との対立というかたちをとったが、こゝ b では、以上のようないきさつによって、二つの法則はともに意識のうちにある、二つの法則の対立は、意識にしかるべきものとして知られているものと、意識にしかるべきものとして知られていないものとの対立というかたちをとることになり、そのようにして、人倫的な自己意識がもつ絶対的な正義が、本質がもつ神々の正義と争うことになるのである。そのようにして、自己意識は意識として存在することになり、その自己意識に対して対象的な現実が、そうした本質として存在することになるのである。けれども、自己意識の実体であるものの側から見れば、自己意識は、自己意識と自己意識に対立する対象的な現実とが統一したものであり、人倫的な自己意識とは、実体のもつ意識なのである。それゆえ、自己意識に対立するものとしての対象は、自分のちからで本質をもつものであるという意味を完全に失ったものとなっている。【407】対象がひとつの物でしかないものとして存在するようなもろもろの領域はとつきの昔に消失しているし、同様に、意識が何かあるものをみずから固定し、個別的な契機でしかないものを本質とするようなもろもろの領域も消失しているのである。現実が、一面的なものとなされることに対抗する力をそなえたものとしてあるものであり、ほんとうのことと同盟を組みながら、ものごとを一面化しようとする意識に対抗するものとして

あるのであり、何がほんとうのことであるかを初めて意識に明かすものとしてあるのである。が、人倫的な意識のほうも、絶対的な実体という酒杯を飲みほすことによつて、意識が自分のちからで存在することにもなう一面性、意識が自分のもろもろの目的をもつことにもなう一面性、意識が自分だけのもろもろの概念をもつことにもなう一面性をことごとく忘却しているのであり、それゆえ、対象的な現実がみずから本質として存在し、自立した意味をもつものとして存在するということも、同時に、絶対的な実体というステュクススの川の流に飲みこまれ、そこで溺れ死んでいるのである。それだから、人倫的な意識のかかげる正義とは以下のようなことなのである。つまり、人倫的な意識が人倫的な法則にしたがって行動するとき、そうした行動によつて実現されることとして意識が見いだすのは、意識が人倫的な法則そのものを実行したにすぎないということ以外の何ものでもないものであり、なされた行為が示すのは、それが人倫的な行為としてなされたということ以外の何ものでもない、ということなのである。人倫的なものは、絶対的な本質であり絶対的な支配力であるものだから、その内容が転倒を被るということは不可能なのである。人倫的なものが絶対的な本質ではあっても、絶対的な支配力を欠くものであつたとすれば、人倫的なものが男や女という個体として存在することによってひきおこされる転倒を経験することとは可能だろう。しかし、人倫的なものが男や女という個体として存在するときも、それは人倫的な意識としてあるのであり、一面的なものとして自分のちからで存在するということは放棄されているのであり、それによって、個体として存在することによってひきおこされかねない転倒も抑制されているのである。もしも男や女という個体が、自分のちからで存在するものであるとしたならば、支配力は絶対的な支配力ではない、ただの支配力となり、絶対的な本質によって転倒させられることになるだろう。そのようにして実体とひとつであることによつて【408】、男や女という個体は、個体の内容であるところの実体のもつ純粹な形式でしかないものであり、個体がおこなう行為は、個体の考えが現実へと移行したものでしかないものであり、しかもその移行は、運動であるとしても、本質を欠いた対立がくりひろげる運動でしかく、対立をあたづくる契機のどちらも、他と異なる特殊な内容や本質をもつことはないものである。したがって、人倫的な意識のかかげる絶対的な正義とは以下のことなのである。つまり、意識によつてなされた行為とは、現実的なものとして存在する意識がとる形態に他ならないものなのであり、意識が知っていることと異なるものではない、ということである。

しかし、人倫的な本質は、自分をみずから二つの法則へ分裂させているのに、意識は、法則に対するふるまいを二つに分裂させることなく、ふたつの法則のどちらかひとつだけ帰属するのである。そのようにして意識は、分裂していない単純な意識とし

であるため、意識は、人倫的なものとしての自分の前にあらわれているのは、それそのものとしてあるがままの本質なのだとして、自分の絶対的な正義を主張し要求するのだが、同様に本質のほうも、実在的なものとして存在する自分こそが正義であることを主張し要求する、つまり、自分が二つの法則に分裂して存在することを主張し要求するのである。しかし同時に、本質が主張し要求する正義は、自己意識とは異なるどこかに存在するというようにして自己意識に対立するものはないのであり、自己意識自身の本質であるものなのであり、本質が実在的なものとして存在し、支配力をもつのは、自己意識においてなのであり、その本質が自己意識と対立することになるのは、自己意識がなした行為によってなのである。というのは、自己意識が自己としてありながら、たんに自己であることにとどまらず、なされた行為へと踏み出すとき、自己意識は、単純に自己意識でいることから抜け出し、みずから分裂をひきおこしているからである。自己意識は、人倫がそれまでおびていた規定性を、つまり、いまだ分裂を介することがないまま存在しているほんとうのことを単純に確信することでしかないという規定性を、行為をなすことをとおして放棄するのであり、自分を、なされた行為としてある自分と、その自分に対立するものとしてある否定的な現実【409】との二つに分離するのである。それだから自己意識は、なされた行為によって、罪を問われることになる。というのも、罪を問うということがなされるのは、自己意識がおこなった行為についてであり、行為をおこなうことは、自己意識を自己意識にしている本質にほかならないことだからである。が、自己意識が罪を問われるものとして存在するということは、自己意識が罪を犯すものとして存在するときすでに、ひとつの法則のほうにしか向いていないのであり、もうひとつの法則を拒み、自分がおこなった行為によってそれを傷つけていたのである。―罪を問うということには、以下のようなむとんちやくさ、曖昧さがいりこむ余地はない。つまり、行為をなすことには、行為をなすことには属さないような外的で偶然的なことが結びついていることがあり、その場合、そうした外的で偶然的なことが結びついていることがはなされなかったことになるから、その行為は罪を問われることがないものとして存在することになるのである。したがって、白日のもとで現実になされた行為であったとしても、それが本人みずからおこなった行為であるとは限らず、そうでないこともある、と考えるようなむとんちやくさ、曖昧さである。行為をなすということは、自分を自分のちからで存在するものとして立て、そうした自分の反対側に、よそよそしい外的な現実を立てるというふうにして、分裂をひきおこすということなのである。よそよそしい外的な現実が存在するということは、行為をなすということそのことに属することとしてあるのであり、そうしたことをひきおこすものとして、行為をなす

ということがあるのである。それだから、罪を問われることがないのは、ただの石として存在するものがそうであるように、行為をなすことがないものだけなのであり、子どもでさえそうした存在ではないのである。―が、人倫的な行動は、もともと内容的に、犯罪という契機をそなえたものとしてあったのである。なぜならば、人倫的な行動は、二つの法則を二つの性という自然的なものに帰属させるということを廃棄することがないまま、自分のうちに分裂をかかえることなく、ひとつの法則のほうだけを向きながら、自然的なものをそのまま自然的なもののままとどめているのだが、自己意識としての行為をおこなうとき罪を問われるものとなるのは、そうした一面性だからである。すなわち、本質のひとつの側面だけをつかんだまま、本質のもうひとつの側面に対して否定的にふるまっている、つまりそれを傷つけている、という罪である。普遍的なものとして営まれる人倫的な生において【410】、罪を問われるものであることや罪を犯すこと、自己意識としておこなう行為と人倫的な行動がどこに属するものであるかについては、後ほど詳しく述べることになるが、今のところ明らかであるのは、行動し罪を問われるのは個々の人間ではない、ということである。というのも、しかしかの自己として存在する個々の人間は、現実性をもたない影だからである。つまり、ポリスに存在するのは、ポリスを生きる普遍的な自己、そして男や女という個体だけなのであり、普遍的なものならざる個別的なものとしての個々の人間は、そうした自己や個体として存在するだけなのであり、行為し罪を問われるのはそうした自己や個体なのであり、個々の人間は純粹に行為の形式的な契機でしかないものなのである。もちろん、個々の人間は、行為の内容となるものでもない。行為の内容となるのは、個々の人間ひとびとがしたがう二つの法則であり人倫なのであり、個々の人間に引きつけて言えば、個々の人間が属する身分ががう法則であり人倫なのである。つまり行為の内容となるのは、類としての実体なのである。類は類がもつ規定性によって種となりはするが、種は種であると同時に、類という普遍的なものまであり続けているのである。自己意識はポリスのなかで、普遍的なものから特殊なものへと下りはするが、下るのはそこまででしかなく、そこからさらに、個別的なものとしてある個人へと下ることはない。個別的なものとしてある個人こそは、排他的な自己であり、行為することにおいて自分が否定しなければならぬ現実を立てるものなのである。が、自己意識はここでおこなうのはそうしたことはない。自己意識が行動をおこなうとき、その根底には、ポリスという全体への揺らぐことのない信頼があり、その信頼には少しのよそよそしいものも、少しの怖れも、少しの敵意も混入することがないのである。

行動することの本性がどのようなものであり、行動するということが現実におこなわれるとき、その本性がどのような展開を見せるかについての経験を人倫的な自己意

識がおこなうのは、人倫的な自己意識がなした行為においてである。そうした経験は、自己意識が神々を支配する法則にしたがう場合にも、人間たちを支配する法則にしたがう場合にもなされる。自己意識にあらわれるのは一方の法則だけだが、その法則は、本質のうちでは、対立する法則と結びついたものとして存在している。本質は二つの法則がひとつになったものなのである。しかし、なされた行為においておこなわれたのは、一方の法則を他方の法則に対立させながら遂行するということではなかった。しかし、遂行された一方の法則は、本質のうちでは他方の法則と結びついたものとしてあるから、一方の法則を遂行することは、他方の法則を呼びよせることになる。そして、呼びよせられた他方の法則は、傷つけられて【411】敵意を抱きながら、復讐を要求する本質となってあらわれる。なされた行為が、他方の法則をそうした本質へと変えたのである。行動することにおいてあることが決意される時、白日のもとにあるのは、決意されたことの全体ではなく、決意されたことの一方の側面だけなのである。しかし、決意することというものをそのものとして見れば、そこでなされているのは否定的なことなのである。つまり、決意によって他のものとして存在するもの、つまり、決意したときには知られていないよそよそしいものを、知られていることに対置することなのである。それなので現実には、意識に知られていないよそよそしいものとしてあるもうひとつの側面を自分のうちに隠しているものとして存在するのであり、現実がそのものとして自分のちからでどのようなものとして存在しているかを意識に明かすことはないのである。――オイディプスは、自分に危害を加えようとした人間を殺すのだが、オイディプスはその人間の息子だったのであり、その人間はオイディプスの父親なのだ。しかしそのことはオイディプスに明かされはしなかった。――オイディプスは王妃を妻として娶るのだが、その王妃はオイディプスの母親なのだ。が、そのこともオイディプスには明かされなかったのだ。例えば、そのようにして人倫的な自己意識は光を忌み嫌う支配力に待ち伏せされるのであり、自己意識によって行為がなされたそのときに、その支配力がいきなりすがたをあらわし、行為をなしつつある自己意識を捉まえるのである。というのも、行為を成し遂げるということは、自分がおこなおうとしていることについて自己意識が知っていることと、それとは対立するものとして存在する現実との対立を廃棄することだからである。行動したものは、自分が罪を犯したことを、そして自分が罪を問われないうちにゆかないものであることを否認することはできない。――行為がなされるといふことは、動かされざるものを動かすことなのであり、可能性のうちにかろうじて閉じ込められていたものを連れ出すことなのであり、意識されていなかったものを意識に結びつけ、存在していなかったものを存在に結びつけることだからである。それだから、なされた行為が白日のもとで向かうさきにあるものこそ、現実のほんとうのすが

たなのである。――なされた行為こそは、意識されたものを意識されざるものに結びつけ、自分を自分の知らないよそよそしいものに結びつけるものである。なされた行為において意識が経験したのは、二つに分裂した本質のもう一方の側面だった。意識はその側面を、意識によって傷つけられ、意識に対して敵意をつのらせた支配力として経験したのだが、意識が経験したのは、その側面もまた自分のものであったということなのである。【412】

待ち伏せしている正義が、行動する意識の前に、その本来の形態をとってあらわれることがなく、そのものとしてしか存在しない、つまり、決意し行動するさいにその罪を問いかけてく内なる声としてしか存在しない、ということがおこることもある。が、人倫的な意識が、法則や支配力が自分に対立するものとしてあることをあらかじめ知っていて、それらは暴力や不正であり、人倫において必然的ではなく偶然にあらわれたものなのだとし、アンティゴネーがそうしたように、犯罪であること知りながら犯罪をはたらき、法則や支配力に背くとき、人倫的な意識はいっそう完全なものとなり、その罪がいっそう純粹に問われることになる。人倫的な意識によってなしとげられた行為が、行為を始めるにさいして人倫的な意識がいだいた見解を転倒させるのである。行為をなしとげることがみずから宣言しているのは、人倫的であるところのものは現実であらなければならない、ということである。というのも、目的が現実のものとなるということが、行動することの目的だからである。行動するということが宣言するのは、現実が存在するものと実体とは統一されたひとつのものとしてある、ということである。行動するということは、さらに以下のことを宣言する。つまり、現実のものとなることは法則にとって偶然的なことではないのである。現実には法則と同盟を結んでいて、ほんとうの正義ではないいかなる法則も現実のものとなることないことを取り決めていて、ということである。人倫的な意識は、自分に対立するものが現実のものとなっていてはゆえに、そして、そうさせているのが自分のおこなった行為であるがゆえに、現実のものとなって存在しているものを自分の現実として承認しないわけにゆかないのであり、自分が罪を問われないわけにゆかないものであることを承認しないわけにゆかないのである。

アンティゴネーは言う。私たちが被ったことのゆえに、私たちは私たちが過ちを犯したことを承認する、と。

承認するということが表明しているのは、人倫的な目的と現実とのあいだの分裂が廃棄されている、ということなのである。承認するということが表明しているのは、正義の他の何ものもちからをもつことはないということを知っている人倫的なところがまえへの還帰がなされているということである。しかし、そうした還帰をおこなうとき、行動するものは、自分の性格を放棄し、その自己がそれまでもっていた現実

のすがたを放棄し、没落している【413】。行動するものが行動するものとして存在するということは、自分がしたがう人倫的な法則を自分の実体としながら、その一部分として生きるということなのである。だから、行動するものが人倫的な法則とは対立するものとしてある法則を承認するとき、行動するものがそれまでしたがってきた法則は、行動するものにとつての実体であることをやめているのであり、行動するものは、自分のそれまでの現実のすがたのかわりに、ここがまえてという現実ならざるものに至っているのである。――確かに、実体が男や女という個体として存在するとき、実体はそれらの個体がおびるパトスとしてあらわれ、パトスをおびた個体は、個体に生命を与えるものとなっているかのように、それゆえ、個体以上のものとなっているかのように見える。しかし同時に個体は、一個のパトスであり、行動するものがもつ性格でしかないのである。人倫にしたがって生きる個体であるとしても、個体はやはり個体のままなのであり、行動するものがしたがう普遍的なものとはひとつなのであり、個体が個体として生きることができるとは、あくまでもその普遍的なものうちにおいてなのである。人倫を生きる個体は、個体したがう人倫的な支配力が、それに対立する別の支配力によって没落させられるとき、その没落を生き延びることはできないのである。

しかしそれだから、個体は、そのようにして没落するさいにも、以下のことを確信している。自分がしたがっている支配力とは反対の支配力をパトスとしている個体も、その個体が自分に与えたダメージと同じだけのダメージを被っている、ということである。二つの人倫的な支配力が互いに対してくりひろげた運動、その二つの支配力にしたがって生き行動した個体たちがくりひろげた運動が、そのほんとうの終わりを迎えるのは、両方の側面が等しく没落を経験することにおいてだったのである。というのも、二つの支配力のどちらも、他の支配力よりも優れたものとしてあり、実体をかたちづくるより本質的な契機である、ということはないからである。二つの支配力は等しく本質的なものとしてあり、二つは互いに対して無関心に存在しているのである、このことが意味するのは、二つが自己を欠いた存在であるということである。行為がなされるとき、二つの支配力のどちらも、行為をなす自己として存在する。しかし、そのようにして二つの支配力が互いと異なるものとして存在するということは、行為をなすどの自己も均しく自己であるということに矛盾することなのであり、二つの支配力を正義を欠いたものなのであり【414】、二つの支配力の没落を必然的にひきおこさないではおかないのである。同様に性格も、性格がになうパトス、つまり、性格が実体としておこなうところのものから見れば、一方の支配力に属するものでしかないが、知られざるものがかかえながら、知られていることにしたがって行為をおこなうという側面から見れば、一方の性格も他方の性格も同じであり、どちらも、意識さ

れているものと意識されていないものとの分裂をかかえているのである。どちらの性格も、意識されているものと意識されていないものとの対立を呼び起こすことになる。知られていなかったことも、なされた行為をとおして、行為がくりだす作品となつてあらわれてくるのであり、どちらの性格も罪を問われないわけにゆかなくなり、そのことよつて消耗し憔悴してゆくのである。それだから、一方の支配力と性格が勝利し、他方の側面が敗北するということがあるとしても、それはことごらの一部分でしかないものであり、仕事が未完成であるだけのことなのであり、仕事は両方の側面が均衡するまで、おしとどめようもなくすすんでゆくのである。両方の側面が等しく降伏するとき、初めて絶対的な正義が成就するのであり、人倫的な実体が、両方の側面をむさぼり尽くす否定的な支配力としてのすがたを、すなわち、全能かつ公平な正義としてのすがたをあらわすことになるのである。

二つの支配力がそれぞれの規定された内容にしたがいながら、どのような個体となつてあらわれるかということを見ることにしよう。二つの支配力のあいだの抗争がしかるべき形態をとるとき、ソフオクレスがその悲劇において描いたような像が提供されることになる。その像をその形式的な側面から見れば、それは、人倫および自己意識が、意識されざる自然的本性と、その意識されざる自然的本性によって引き起こされる偶然的なできごととのあいだでくりひろげる抗争である(後者が前者に対抗するもうひとつの正義であるのは、後者が、ほんとうの精神でしかないものであり、実体とそのままとつになつていだけのものでしかないからである)。像をその内容から見れば、それは、神々を支配する法則と人間たちを支配する法則とのあいだでくりひろげられる葛藤である。――青年は、家族精神という意識を欠いた本質から抜け出て、共同体を統治する個体となる。【415】しかし、青年が青年が振り切った自然的本性にまだ属したままの存在であるということがあらわになるのは、青年が偶然に兄弟の兄か弟として生まれているときである。アンティゴネーの兄たちがそうであったように、共同体を統治するさいに二人は同じ権利をもつ。先に生まれたか後に生まれたかといった違いは、人倫的な本質へと足を踏み入れた二人にとつては、自然的本性による区別でしかなく、意味をもたないこととしてある。しかし、ポリスの統治にあたるものとなるということは、ポリス精神の単一の魂となり、ポリス精神の自己となるということなのであり、統治する個人が二人いるということはありえないことなのである。ポリスは統一したものでなければならず、ひとりのものによつて統治されなければならないというところが人倫的な必然性なのであり、それに対立するものとして、偶然のなりゆきで兄弟のひとりとして生まれたものであるという自然的本性があらわれているのである。それだから、兄弟のあいだでおりあいをつけることはできない。二人がともに国家権力への等しい権利をもつということが、二人を破滅させ、二人に

権利を失わせるのである。できごとをひとりひとりの人間のふるまいとして見れば、共同体を占有することがなく、他者がトップにいる共同体を攻撃する側にまわった者が、犯罪をおかした者となる。それに対して、相手を共同体から引きはがされた一人の人間でしかないものとして捕らえるすべをわきまえており、何もできなくさせながら相手を共同体から追放する側にまわった者は、統治への権利を自分のものとする者となる。が、後者が攻撃したのは、個人として存在する個人だけだったのであり、ふたりがそれをめぐり争ったところのもの、つまり、人間たちを支配する正義としてある本質ではなかった。共同体は、からつぽの一人の人間によって攻撃されたり防衛されたりしながら維持されてゆき、そのさなかで兄弟たちは自分たちが、互いに相手によって没落させられてゆくのを目にするようになる。というのも、全体を危険に晒してまで、自分が自分のちからで存在するものであることにこだわろうとする者は、共同体から追放され、自分のうちで自分を崩壊させることになるからである。【416】

しかし、共同体が名誉を与えるのは、共同体の側に立った者である。反対に、ポリスの城壁の上に立ち、自分が共同体を荒廃させようとしていることをかねてから表明していた者に対して、単一の自己による統治を回復した共同体がおこなうのは、亡骸を埋葬することではなく、亡骸にさらに罰をくだすことなのである。意識の最高の精神である共同体につかみかかろうとした者からは、人生を全うした者が受けるべき荣誉、死別した精神が受けるべき荣誉は奪われなければならないのである。

このようにして、普遍的なものは普遍的なものがちぢくるピラミッドのただの頂点にすぎないものをたやすく削ぎおとすのであり、人間が自然的本性をひきずった個別的なものとして存在することを原理とする家族が普遍的なものに反抗して立ちあがることに對して勝利をおさめはする。けれどもそのことをおして、普遍的なものは、神々を支配する法則との闘いに巻き込まれるにすぎないのである。つまり、自分自身がしていることについての意識をもつ精神は、そうした【417】意識をもたない精神との闘いに巻き込まれるにすぎないのである。というのも、後者は、前者と対等のもうひとつの本質的な支配力だからであり、それゆえ、後者は前者によってただ侮辱されるだけであり、破壊されることはないからである。しかし、後者が、権力を持ち白日のもとにある法則に對抗しながら、現実には何かをなしとげるための頼みとするのは、青ざめた影でしかない個々の人間なのである。それなので、後者は、弱さと暗さにとりつかれた法則として、さしあたつては、白日のもとで力をふるう法則に屈服することになる。というのも、弱さと暗さにとりつかれた法則としてある権力が通用するのは、地下においてであり、地上においてではないからである。しかし、地下に存在する内なるものからその名誉と支配力を奪うとき、白日のもとに存在する現実的なものは、自分の本質を食い尽くしてしまうことになる。白日のもとに公然と存

在する精神がもつ力の根は地下にあるのである。ポリス市民に自分たちの生き方を確信させ、それを確かなものとしている確信が、すべての市民をひとつに結びつける誓いとなるようなほんとうの確信であるのは、すべての市民の実体である、意識をもたない無言の実体においてだけなのであり、忘却の川のうちにおいてだけなのである。そのことによつて、白日のもとに公然と存在する精神がなしとげようとしたことは、それとは反対のものへと転じるのであり、精神は以下のことを経験する。自分の最高の正義は最高の不正義であり、自分がおさめた勝利は自分自身の没落であるということである。それだから、自分の正義が侮辱され死に至らせられた者は、復讐をはたすためのもろもろの道具を見つけることができるのであり、それらの道具は、自分を傷つけた支配力と同等の現実性と支配力をそなえたものとして存在することになる。それらの道具がもつもろもろの支配力とは、祭壇に祀られるべき亡骸を犬や鳥によつて汚されたところの他のもろもろの共同体なのである。大地こそはあらゆるものを作らせたせている元素的な個体だが、亡骸はその大地へと丁重に送り還されることによつて普遍的なものへと高められることがないまま、地上に横たえられ犬や鳥によつて汚されながら、現実の国にとどまったままにされるとき、その亡骸が、神々を支配する法則になう力となり、自分がおこなっていることについての意識をもつ現実的で普遍的なものとして、つまり共同体としてあらわれてくるのである。それらの共同体が敵意をもつてことにとりかかり、家族が互いにいだく慈しみというみずからの力を侮辱し壊した共同体を破滅へとみちびくのである。

ソフォクレスの悲劇においてくりひろげられている以上のような表象において、人間たちを支配する法則と神々を支配する法則とがくりひろげる運動が、その運動がおびる必然性を表現するものとするのは、そこに登場するもろもろの個体である。普遍的なものはそれらの個体がつバースとしてあらわれ、くりひろげられる運動は個体が個体としておこなう行為としてあらわれる。そのことがこの運動に、それが必然性にもとづくものではなく、ゆきあたりばつたりの偶然であるかのような外見をあたえることになる。しかし、個体が個体としておこなう行為が、自然的本性をひきずった個別的なものとしてふるまうということを経験するものであるとしても、その原理を原理としての純粹に普遍的なすがたにおいて見るならば、それは神々を支配する内なる法則と【418】と我々が呼んできたものなのである。この法則が、白日のもとに公然と存在する共同体をかたちづくる契機となるとき、それは、地下においてしか有効でないようなもの、あるいは、地上において存在するとしても、表面的・外面的にしか有効でないようなものではなくなり、現実のポリスにおいて現実には公然と存在し、現実に公然と運動をくりひろげるものとなるのである。個体がいだくバースがくりひろげる運動として表象されたものが、白日のもとで公然と存在し公然と運動をく

して没落し、ポリスを越えた普遍的な共同体のうちで生きるコスモポリタンの存在となるのである。この共同体がもつ普遍性は、ポリスがもつていたような二重構造をもつことのない単純な普遍性であり、精神を欠いた死せる普遍性なのである。この共同体を生き生きとしたものにして存在するのは、共同体がもつ死せる普遍性ではなく、個別的なものとして存在する個体がおこなう個別的なふるまいなのである。こうして、精神の人倫的な形態は【421】消失し、別の形態がそれに代わるものとしてあらわれることになる。

そのようにして人倫的な実体は没落し、精神の別の形態へと移行してゆくのだが、それを規定しているのは、それゆえ、人倫的な意識が法則のほうを向くということが、本質的にそのことが何ものも介することなくおこなわれる、ということである。何も介することがないという規定が含むのは、人倫にもとづく行動が、意識のもつ自然的本性そのものが入り込んだものとしてある、ということである。人倫が現実的なものとなるにつれて、その現実が白日のもとにさらすのは、人倫が矛盾をかかえたものとしてあり、人倫を破壊させるものの萌芽をかかえたものとしてある、ということに他ならない。人倫的な精神では二つの法則が美しく調和し、静かな均衡を保っていたはずだったが、その静けさと美しさは、そうした破壊の萌芽をひそませたものだったのである。そういうことになるのは、意識が何も介することなく法則のほうを向くものとして存在するということが、矛盾する意味をもつこととしてあったからである。つまり、自然的本性にしたがいながら意識を欠いたまま静かに安らぐということでありなら、同時に、精神が自己意識をもつことでその安らぎが安らげられないものともなるという矛盾する意味をもつものだからである。―ポリス市民たちがそのように自然的本性をおびた存在であるために、人倫としてあるポリスも、自然的本性に規定され、それゆえ、自然的本性によって制限された個体として存在することになるのであり、そのためポリスが、自然的本性によって規定され制限された個体として存在する自分を廃棄するとき、ポリスは、それとは異なる個体として存在することになるのである。しかし、自然的本性によって規定されたものとして存在し、制約されたものとして存在しているポリスが、否定的なものそのものとしてポリスだったのであり、個体としてふるまう自己としてあるポリスだったのである。それだから、ポリスが自然的本性によって規定されたことをやめるとき、ポリスの精神は生命を失ってしまうのであり、ポリスに属するすべての市民のうちにあつて自分を意識していた実体が失われてしまうのである。実体がポリスの市民たちにおいてあらわれるのは、形式的な普遍性としてとなり、実体が生き生きとした精神としてポリス市民たちのうちに宿ることはなくなるのである。ポリス市民たちの個体としてのふるまいがひとかたまりのものへと結束することはなくなり、ポリス市民たちのふるまいは多数の点へ

と分散してしまうのである。【422】

c 法が支配する状態

人倫においては、個体としてふるまう個体と実体とが何も介さずにそのまま生き生きと統一されていたが、その統一は普遍的な統一へと還帰している。この統一は精神を欠いた共同体として存在し、共同体に属する個体には意識されないものとしてあるような実体であることをやめている。共同体に属する個体は、個別的なものとして自分のちからで存在するものになっていて、そのことをもとに、自己でありながら実体でもあるものを意味するものとなっている。普遍的なものは、絶対的に多数の個人というアトムへと分散していき、そのようにして精神としては死んでいる。そこに存在するのは平等である。つまり、すべての個人が、等しく誰でもあるものとして、つまり人格として存在している、ということである。―人倫の世界において、地下の隠れたところにあり神々を支配している法則と呼ばれていたものが、なされた行為において、内なるものであることをやめて、現実へと歩みでたのである。人倫の世界においては、個別的なものとして存在する個々の人間は、現実的には、家族に属するものの誰にも流れる普遍的な血のひとしずくという意味をもつものとしてしか存在していなかった。人間は、ひとりの個別的な存在としては、自己をもたない精神、この世にはいない死んだ精神だったのである。しかしここでは、個別的な存在としての人間が、そうした現実ならざるものとしてあることを抜けだしているのである。人倫的な実体は、ほんとうの精神でしかないものとなっているのであり、そのことが、個別的なものとしての人間を、自分自身の存在について確信をもつということへと還帰させるのであり、そのことによって、個別的なものとしての人間は、自己でありながら実体であるものとなるのである。個別的なものとしての人間が実体であるのは、個別的なものとしての人間が肯定的な普遍的なものであることによるのだが、個別的な人間が自己として現実的なものとなるとき、その自己は、否定的な普遍的なものとして存在する。―さきほど我々が見たのは、人倫的な世界を支配するもろもろの支配力とそれがまとももろもろの形態が、誰も彼をも没落させる空虚な運命がはたらかせる必然性のうちへと沈んでゆくときのありさまだった。その必然性は、誰も彼をも単純に没落させるという単純な必然性だった。その必然性が支配力をふるったとき、そこでなされていたのは、人倫的な実体とその単純さのうちへと折れ曲がりながら還ってゆく、ということなのだが、人倫的な実体という絶対的な本質が自分のうちへと折れ曲がり自分へと還っていったとき、つまり、空虚な運命がその必然性をはたらかせたとき【423】、それをおこなっていたのは、自己意識がもつ自己にほかならないのである。

そのようにして、これからは、自己意識の自我が、そのものとして自分のちからで存在する本質としてあらわれることになる。自我は、他の自我によって承認されたものとして存在するが、自我がそのように承認されたものとして存在するということが、自我が実体として存在することなのである。しかし、実体として存在するといふことがなされるのは、抽象的な普遍としてではない。なぜならば、実体として存在するといふことがその内容としているのは、他人に対して冷淡な自己であつて、実体のうちへと溶けこんでいる自己ではないからである。

それなので、人格として存在するといふことがここで意味するのは、人倫的な実体を生きるといふことをやめているといふことなのである。人格として存在するといふことは、ここでは、意識が自立したものとして存在するといふことが、現実になされているといふことを意味する。人格として存在するといふことが、非現実的な観念となることもあるが、そうした観念は、人格として存在するといふことが現実となるといふことを断念することによって生じるのだが、それは以前にストア主義的な自己意識としてあらわれたものだった。ストア主義的な自己意識は、主人が奴隷を支配し、奴隷が主人に仕え、服従するといふことのなかからあらわれたが、ここでは、自己意識が自己意識のまま存在していたのだった。それと同様に、人格というありかたも、精神のままである精神からあらわれたのであり、ここでは、普遍的な意思がすべての人間を支配し、すべての人間はその普遍的な意思に仕え、それに服従していたのだった。ストア主義にとつてそのものは抽象のうち存在するものでしかなかったが、それがここでは、現実的な世界となつているのである。ストア主義とは、法が支配する状態が原理としていふことを、つまり、自己意識が精神を欠いたまま自立するといふことを、その抽象的な形式へともたらした意識にほかならなかった。現実からの逃避のため、意識が手に入れているものは、自立という観念でしかないものだった。意識が絶対的に自分のちからで存在するものであるとしても、それは、意識が自分の本質を、しかしかの存在するものに結びついたものとするのではないからであり、あらゆる存在を放棄し、自分の本質を、純粹な思惟がもつ統一のうちには置かないからなのだ。それと同じように、人格として存在する法も【424】、個人がより豊かであり多くの力をもつものとして存在するといふことに結びつくこともなく、生き生きとした普遍的な精神に結びつくこともないものなのである。それが結びつくのは、抽象的な現実としてある個人という純粹な一なるもの、つまり、自己意識という一なるものなのである。

人格とは、かつてのストア主義における自己意識の抽象的な自立が現実化したものであるわけだが、人格は、かつてストア主義がそのあとおこなつた運動をひき続き回復することになる。ストア主義は、意識の懷疑主義的な混乱へと移行することになり、

否定的なことについてのたわ言をとめどなく口にし始める。そのたわ言は、存在および観念のひとつの偶然的なちから別の偶然的なちからへと、ひとつの定まつた形態をもつことなく、とめどなくさ迷つてゆく。意識が絶対的に自立したものであるとき、たわ言によつて、存在および観念の偶然的なちからが解消されるのだが、たわ言は、再びそれを生みだしもするのである。実際にそこに存在しているのは、意識が自立したものでありながら自立していないものであるという矛盾でしかないものなのである。―同じように、法が人格というかたちで独立したものとなるときも、懷疑主義の場合と同じ全面的な混乱が生じるのであり、互いを解消するといふことが生じるのである。―といふのは、絶対的な本質と見なされているのが、人格という純粹で空虚な一なるものとしてある自己意識だからである。普遍的なもののそうした空虚なありかたとは反対に、実体は自身や内容に満たされた形式として存在する。だが、ここでは、そうした内容が完全に自由にされ、秩序を与えられることがないのである。―といふのは、そうした内容を制御し、統一したものとまとめるといふことをおこなう精神が、ここにはもはや存在しないからである。―人格とはそうした空虚な一なるものなのだが、そのため、その一なるものが実在するものといふかたちをもつとき、それは偶然にしかしかかものとして存在するだけであり、それが運動し行爲するときも、それらには本質が欠けており、しかるべき何かとして存立するに至ることはないのである。それだから、懷疑主義がそうであつたように、法の形式主義も、【425】その概念によつて、固有の内容をもたないものとして存在する。自分が占有する多様なものがしかるべき何かとして存立しかかつていふのを目にするとき、法の形式主義がおこなうのは、存立しかかつていふそれに、抽象的に普遍的なものという刻印を押しこたなのである。そのことによつて、存立しかかつていふものは、所有物と呼ばれるようになるのである。それは懷疑主義がおこなつたことでもあつた。しかし、法の形式主義は懷疑主義そのままではない。抽象に普遍的なものという規定をされた現実が、懷疑主義においては仮象であるものと呼ばれ、否定的な価値しかもたないものであつたのに対して、法においては、肯定的な価値をもつものとなるのである。懷疑主義において現実が否定的な価値しかもたないのは、現実的なものが、思考するものとしての自己であるといふ意味をもつもの、すなわち、そのものとして普遍的であるものであるといふ意味をもつものであるからである。それに対して、法において現実が肯定的な価値をもつのは、現実的なものが、私の所有というカテゴリーが意味するところのものである。つまり、その存在が、私の所有するものとして承認され現実的なものとなつていふからである。―が、法における現実的なものも、抽象的な普遍的なものであるという点では、懷疑主義における現実的なものと同じなのである。法における現実的なものもつ現実的な内容は、つまり、現実的なもの規定されたありかた―

私が外的に占有しているものというありかたであれ、精神や性格の内的な豊かさや貧しきというありかたであれ――は、法の空虚な形式には含まれないものであり、その形式とは無関係なものなのである。それゆえ、そうした内容は、ひとつの独自の支配力に属することになる。その支配力は、抽象的で普遍的なものとは別のひとりの人間として存在し、偶然的で恣意的にふるまうのである。――それだから、法のもとにある意識が現実的にかじかかものとして存在するときには経験することになるのは、自分の実在の喪失なのであり、自分が完全に非本質的なものであるということなのであり、ひとりの個人をひとりの人格と呼ぶことは、その個人にたいする軽蔑を表明することだ、ということなのである。

内容を自由に支配する支配力は以下のような規定をもつものとしてあらわれる。すなわち、人格というアトムが絶対的に多数のものへと分散しながらも、その分散が、それがもつ規定性の本性によって同時に、もろもろのアトムにとつてよそよそしくて【426】精神を欠いたものとしてあるひとつの点へと集められる。そのひとつの点には、一方では、人格として存在するアトムが他人に対して冷淡なものであるのと同じように、純粹に個別的なものとして存在する。が、他方では同時に、アトムが内容をもたない空虚な個別的なものとして存在するのは反対に、アトムに対して、すべての内容を意味し、そのことによつて、実在する本質を意味するものとして存在するのであり、アトムが絶対的な現実であると思ひ込んでいるが、それそのものとしては本質を欠いた現実でしかないものに対して、そのすべてを支配する普遍的な支配力として存在し、それに代わる絶対的な現実であるものとして存在するのである。――そうしたひとつの点として存在するものが、世界の支配者としてのローマ皇帝である。世界の支配者は、そのようにして、絶対的なものがありながら、同時に、あらゆる存在を自分のうちで把握しているような人格なのであり、それがもつ意識によれば、自分よりも高次の精神は存在しないのである。世界の支配者は人格であるが、すべてのローマ市民と向かい合う孤独な人格である。が、孤独な人格が全ローマ市民の前に普遍的なものとしてのそのすがたをあらわすとき、その、普遍的なものとしてのすがたをかたちづくるのは、全ローマ市民の存在なのである。というのも、ひとりひとりのローマ市民は個別的な存在だが、そうした個別的な存在が、ほんとうに、個別的なものとして存在するのは、数多くのものがひとりのこらず個別的なものとして存在しているときだけだからであり、世界の支配者としてのローマ皇帝も、その数多くの個別的なものの中のひとりにすぎないからである。そうした数多くの個別的なものから切り離されたならば、孤独な自己は、実際に、非現実的で無力な自己となるのである。――が、同時に、その孤独な自己が、しかじかの内容について意識するとき、その内容は、その孤独な自己が世界の支配者という普遍的な人格として存在するということと対立

するものとして存在することになる。しかし、その内容が、その内容を否定する支配力、つまり、孤独な自己がその内容に対してふるう否定的な支配力の手を離れるとき、そこに、孤独な自己のもとにいるもろもろの精神的な支配力がくりひろげるカオスがあらわれる。つまり、ローマ皇帝の臣下として権力をふるうものたちがくりひろげるカオスがあらわれるのである。それらの支配力が、孤独な自己による束縛を解かれ、元素的な本質へと還り、野性的な放埒にふけりながら、狂騒的で破壊的な運動を互いにむかつておこなうのである。そのとき、孤独な人格として存在する自己意識は、それらの支配力に対して無力であり、それらの支配力を閉じ込める困いとなることもできないのであり、むしろ、それらの支配力がくりひろげる騒乱をなりたせる地盤となつていのである。以上のようにして、世界の支配者であるローマ皇帝は、自分が現実存在するそれらの支配力すべての総体であることを知るときは、巨大な自己意識となり、自分が現実に存在する神であることを知るのであるが、しかし、自分が【427】形式的な自己でしかないものであり、自分にはそれらの支配力を制御することができないということを知るときは、自分がくりひろげる運動も自己享受も、自分が制御すべきもろもろの支配力がくりひろげると同様の巨大な放埒となるのである。

世界の支配者が自分が何であるかを、つまり、自分が現実を支配する普遍的な支配力であるということを知るときは、現実を意識するのは、自分の臣下たちの自己が自分に対峙するものとしてあらわれるとき、その自己に向かって破壊的な暴力をふるうことにおいてである。というのも、世界の支配者もつ支配力とは、かつて人倫においてそうだったように、ひとつのものとしてある精神がふるう支配力ではないからであり、もろもろの人格は、自分の自己意識はそうしたひとつのものとしてある精神のうちにあるのだというような認識をもつものとしては存在していないからである。人格であるということとは、自分のちからで存在するということなのであり、人格はただの点として存在し、他者に対して絶対的に冷淡なのであり、その冷淡さからは、他者と繋がりをもつことは排除されているのである。それだから、もろもろの人格は、互いに対して否定的な関係しかもつことはないし、人格どうしを結びつけ繋げるものとしてあるはずの支配者に対しても、否定的な関係しかもたないものである。世界の支配者は、人格どうしを繋げるものとして、人格の形式主義に本質と内容となるものであるのだが、内容となつていなくても、それは人格にとつてよそよそしいものとしてある内容なのであり、本質となつていなくても、それは、人格にとつて人格の本質であるところのもの、つまり、人格が内容をもたずに自分のちからで存在するものとしてあるということを廃棄するような否定的な本質なのである。――そのようにして、世界の支配者は、人格として存在するもろもろの人格どうしを繋げるものでありながら、人格として存在するもろもろの人格を破壊するものでもあるのである。それだから、法によつて人格として

存在する人格の内部で、自分にとってよそよそしいものとしてある内容が重みを持ちだすとき―よそよそしい内容が人格の内部で重みをもつのは、その内容こそは、実在するものとしてある人格そのものだからである―人格が経験するのは、自分は実体を欠いたものとしてある、ということなのである。人格が自分の地盤としているのは本質を欠いたものであるのだが、世界の支配者がおこなうのは、その地盤を破壊的に掘り返すことなのである。そしてそのことが世界の支配者に、自分をあらゆるものの支配者なのだという意識を与えることになる。しかし、支配者の自己はそのとき、ただ荒廃をもたらしているだけなのであり、したがって、自己を見失っているだけなのであり、自分の自己意識を投げ捨てているのである。【428】

こうして自己意識には二つの側面があることになる。一方で自己意識は絶対的な本質として現実的なものとなっているのだが、それがどのような性質のものかは、いま見たとおりである。他方で意識が自分のそうした現実から自分のうちに引き戻されるときに考えるのは、自分が本質ならざるものとしてあるということである。我々が先に見たように、ストア主義は純粋に思惟するということを自立させたが、その自立がほんとうはどういうことであるかが見いだされたのは、懷疑主義を経ながら、不幸な意識に至ったときであった。―つまり、意識がそのものとして自分のちからで存在するのは意識がほんとうはどのような状態にあるときなのかが見いだされたのは、不幸な意識においてだった。が、不幸な意識において、ほんとうのことが知られたとしても、その知は、意識が意識としてもつ一面的な洞察にすぎないものとしてあらわれただけだった。しかしここでは、そのほんとうのことが、現実に存在するほんとうのこととなつて出現しているのである。その、現実に存在するほんとうのことは、自己意識が普遍的に自己意識と見なされるものとして存在するということだが、自己意識にとつてよそよそしい実在として存在する、ということである。つまり、自己意識が普遍的に自己意識と見なされるものとして存在するということが、自己の普遍的な現実としてありながら、その現実が直ちに転倒したものとなるのである。つまり、自己の普遍的な現実が、自己がその本質を喪失することとしても存在するのである。―自己が現実的なものとして存在するということは、人倫的な世界においてはなされなかった。が、その、自己が現実的なものとして存在するということが、人倫的な世界が人格のうちへと還帰することによって、獲得されたのだった。人倫的な世界においてひとつのものであったものが、展開されたものとなってあらわれるのである。しかしそのときそれは、自分にとつてよそよそしいものとなるのである。【429】